

(報告)

ガリシア語における人名定冠詞の用法に関する考察 A consideración verbo dos empregos do artigo determinado cos nomes propios de persoa en galego

浅香武和

Takekazu ASAKA

はじめに

人名定冠詞とは、スペインのガリシア語圏内で人名(洗礼名)の前に定冠詞第一形式または第二形式単数形の男性形・女性形を伴って使用されるものを言う。

ここに定冠詞の単数形と複数形の男性形・女性形の第一形式と第二形式の形態をあげる。例えば O Xosé, A María, polo Xosé, pola María のように使われる。第二形式は、前置詞 *por*, 副詞 *u*, 動詞 *-r*, *-s* で終わる語, 代名詞 *nós*, *vós*, *nos*, *vos*, *lles* の後で使われる。

数	性	男性形		女性形	
		第一形式	第二形式	第一形式	第二形式
単数形		o	-lo	a	-la
複数形		os	-los	as	-las

小論は、ガリシア語における人名定冠詞の使用について、文法書の記述、地理的差異、文学作品からの考察を踏まえて、その用法について分析を試みるものである。

I 中世ガリシア語の人名定冠詞の使用

ラテン語からガリシア語への定冠詞への変化は次のようになる:

*illūm Petrum > lo Petro > o Pedro

中世ガリシア語の文献では、1250年頃に活躍した吟遊詩人 Martin Codax の *Cantigas de amigo* (ピンデル写本)のなかに *lo mar* および *o mar* を確認できる。しかし、人名定冠詞の使用は確認できない。Fernández (1971:68-74)も中世ガリシアの文献から用例を見出すことはできない、と記している。また、Hermida (1986)によると、定冠詞を伴う構造は改新的なものであるとされる。人名定冠詞は近世になってから使用されるようになったと考えられる。定冠詞+普通名詞+動詞+補語という、普通名詞に定冠詞が伴って構成される統語的構造に平行して、人名にも定冠詞が統語的に一つのまとまりのある単位として取り入れられ、定冠詞+人名+動詞+補語という構造になったと考えられる。それを確認するために、ガリシアの19世紀末に始まるレシュルディメント(文芸復興)期の文学作品を調べると、人名定冠詞の使用は認められる。

II 人名定冠詞の用法に関する文法書の記述

ガリシア語の文法書では、初級文法書を除いて、人名定冠詞に関する記述は大体の文法書に説明されている。ここに発行された年代順に、その記述をとりあげて考察してみる。

1) Álvarez et al. *Gramática galega*, Galaxia, Vigo, (1986:145): 人名への冠詞の使用は明らかに親愛感の口調を与えるとある。A Sita tivo un meniño. (シータに男の子が生まれた); Voulle mercar uns doces ó Xosé. (ショセにお菓子を買ってあげよう); E non sabe-lo que lle pasou ó Carlos? (それで、君はカルロスに起きたことを知らないのか?) の例文があげられている。(ó は前置詞 a + 定冠詞男性単数第一形式 o の融合形)

2) Feixó Cid, *Iniciación ó galego*, Ir Indo, Vigo, (1993:80): 人名、名字または渾名への定冠詞の使用はガリシア語ではとても頻繁に起きる。軽蔑のニュアンスでも俗語的な性格でもないとする。O Luís éche amigo da Xulia. (ルイスはシューリアの友人だ)。この例文では、連帯の与格の代名詞 *che* が *ser* 動詞に前接して、聞き手を会話の中に取り込みより親近感を表す働きもあり、人名定冠詞と連帯の与格代名詞の二つが使用され相乗効果を醸し出している。

3) Camino Noia et al. *Lingua COU*, Xerais, Vigo, (1993:171): 大学予備課程向けの学生に編集された教科書で、カスティーリャ語では俗語的または軽蔑の意味があるが、ガリシア語でのこの用法

はカスティーリャ語とは異なる、と説明され、次の例文が挙げられている。**O Brais éche irmán da Irimia.** (ブライスはイリミアの兄貴だ); **O Castelao creou o personaxe do Rañolas.** (カステラオはラニョラスという人物像を創り上げた)。Castelao は名字で、Rañolas は渾名である。洗礼名以外にも定冠詞がつけられている例である。O Brais éche のように連帯の与格代名詞 che が共起している。

4) Freixeiro Mato, *Gramática da lingua galega*, A Nosa Terra, Vigo, (2000:265): 特に口語において情緒性・親近感・信頼性を表すために人名に定冠詞が現れる使用されるとある。**O Xurxo non traballa nada.** (シュルシヨは全く働かない)。

5) Álvarez et al. *Gramática da lingua galega*, Galaxia, Vigo, (2002:379): 人名に定冠詞を伴う用法は、ある地域ではかなり頻度が高いが、若者世代全般では弱くなっているとし、親近感と信頼性を示すがフォーマルな形ではない、という。その例として、**Viñeron comigo a Andrea e o Cidre.** (アンドレアとシドレが私と一緒に来た)、が挙げられている。さらに、渾名に定冠詞が付くのは習慣的で、これは、単に形式上のもので渾名の起こりが原因で、**O Roxo** (赤色)、**O Roibo** (赤色)、**O Picholas** (噴水口)のような例を挙げて、親しみを表すとしている。

6) Hermida G., C., *Gramática práctica* (Morfosintaxe), Sotelo Blanco, Santiago de Compostela, (2004:62): 人名に定冠詞を付けるのは任意的であるとする:**Pedro/ o Pedro** ペドロ, **Florinda/ a Florinda** フロリンダ。この用法は俗語的ではなく、話し言葉に使われる。地理的に見ると、特に、ガリシア東部の日常会話では常に定冠詞を伴うが、西部では定冠詞は特定の名前を持つ人物にたいして深い愛情を表す時に現れる、という説明がある。**A Marica non está ben.** (マリカは元気がない)、を例として挙げている。

この文法書は、唯一、人名定冠詞の地理的な使用差について言及している。著者は Fernández Rei との共著で *A Nosa fala, Bloques e áreas lingüísticas do galego*, Consello da Cultura Galega, Santiago de Compostela, 1996 を編集し、ガリシア語の地域的差異を言語学的に分析している。

7) López Viñas et al. *Gramática práctica da lingua galega*, Baía Edicións, A Coruña, (2010:270): 定冠詞の使用は任意的で、親近感または軽蔑的な表現のニュアンスにつながる、と説明している。**O Diego parece moi espelido.** (ディエゴはとても利口に見える)。**A Lucía é moi rabuda.** (ルシーアはとても怒りっぽい)。渾名と名字に **Estes días o Vacamarela non pode andar ben.** (最近バカマレラはうまくいってないらしい)。**Os Moscoso son trece irmáns.** (モスコソ家は13人兄弟だ)。さらに、動物の名前にも定冠詞がつけられている例があげられている。**O sábado a Lúa pariu tres gatos.** (土曜日ルアーは猫を3匹産んだ)。

以上、7冊の文法書から人名定冠詞の使用に関する記述を考察したが、何れも親しみの意味で用いられていることがわかる。さらに、連帯の与格代名詞と共起して使用される例が確認される。ただし、López Viñas (2010)には、軽蔑的な意味でも使うとあり、カスティーリャ語と同じような用法もあることがわかる。第III章の文学作品に見られる例で、筆者が挙げる Blanco Amor からの例文は、蔑視的な意味で使用されていると思われる。

III カスティーリャ語における人名定冠詞の使用

カスティーリャ語 (=スペイン語) では洗礼名に定冠詞を付けることがあるが、これは粗野な俗語であるとされている。例えば、**¿Conoces a la Rosario, chica muy tonta?** 「かなりおバカな女の子のロサリオを知っているかい」のような使用がある。しかし、友人同士のインフォーマルな会話では定冠詞の使用はよくあるようだ。**El Toño, la Mari, la Paqui** のように省略された人名に定冠詞が付くのは、よく知っている人の間で親しみを込めて使われる。地理的には、カタルーニャ、レバンテ地方(アリカンテ、ムルシア)、アンダルシアでは、普通に使われるようである。

次は、ある人が自分の友達について話しているような例ではどうだろうか。

Quedamos siempre en el bar Marifer, pero al Paco no le gusta y ha dejado de venir.

「いつも私たちはバル・マリフェルにいるが、パコの奴、気に入らないのか、来るのをやめた」

この文では Paco の前の定冠詞 el (文中では前置詞の a と結合して al) は文法的に余剰である。

では、別のケースはどうであろうか。あなたがバル・マリフェールに友達として、あなたの知らない人が二人入って来て、その二人があなたの友人と束の間の立ち話をして、二人が立ち去った時、あなたが尋ねます。

Oye, e, **el Paco** a qué se dedica? 「あのさ、パコの奴は何の仕事してるんだい」

これは y este Paco, el tal Paco のようにするのが良いが、指示詞が省略されているだけで、文法的には正当な使用である。

人名ではなく、スペインの首相(ガリシア出身)の名字に定冠詞が現れる次のような例がある。

Mira lo que ha dicho **el Rajoy**. 「ラホイが言ったことを見る」

一方、渾名に定冠詞が付く場合は、**El Lute**, **El Dioni** などごく普通にかつ習慣的であるとされる。

IV 『ガリシア言語地図』にみる人名定冠詞

Instituto da Lingua Galega, *Atlas Lingüístico Galego, II, Morfoloxía non Verbal*. (1995: 240-241) の、Mapa 215 と Mapa 216 は人名定冠詞に対する質問事項の調査結果が記載されている。

MAPA 215 の調査項目は、冠詞+人名(Artigo + nome propio)で 167 地点を調査したものである。その結果は、Xan é o noso veciño.(シヤンは我々の隣人だ)のように、定冠詞が付かない地点は 87ヶ所で、**O Xan é o noso veciño**. のように定冠詞が付くのは 80ヶ所である。さらに 16ヶ所では両方可能であるという。この文は、主語に定冠詞が付いた場合である。

MAPA 216 は、前置詞+定冠詞+人名(Prep.+artigo+nome propio)で、同じく 167 地点を調査した結果は、A Miguel collérono preso.(ミゲールは投獄された)、のように定冠詞が付かない地点は 108ヶ所、**O Miguel collérono preso**. のように定冠詞が付く地点は 59ヶ所である。この文は、目的語に定冠詞が付いた例である。(Ó=前置詞 a+定冠詞 o の融合形)

質問事項 477 には Os bens **do** Miguel (ミゲールの財産)、478 は Vamos á taberna **do** Xusto.(シュストの飲み屋に行こう)、のように定冠詞が現れている。この質問文の調査報告は地図には記載されていない。(do=前置詞 de+定冠詞 o の融合形)

言語地図の 215, 216 の調査結果から次のような考察ができる。ガリシア北部からガリシア西部の海岸地域は定冠詞の使用が見られない。ただし、西部地域では散発的に現れている。それに対して、ガリシア中央部からガリシア東部では大部分の地点で人名定冠詞の使用が読み取れる。このことと関連して、Fernández Rei e Hermida Gulías, *A Nosa fala, Bloques e áreas lingüísticas do galego*, Consello da Cultura Galega, 1996, pp.116-117 の中央ブロックから東部ブロックの境に位置する O Xuncal- Corbelle- Vilaiba で採録された ETNOTEXTO 4 では明らかに人名定冠詞の使用が認められる。(太字 5 か所は筆者による。)

Mira, unha vez na Coruña, eu mais unha prima carnal **do** Vitor, do meu Vitor, que está aquí en Corbelle de Baixo, estábamos na Coruña. É o **Vitor** tén unha sobriña lekhítima na Coruña. ... É iba a Ana María é máis un fillo desa prima carnal, que está aquí en Corbelle de Baixo; ... É esa sobriña **do** Vitor, xa había tempo que estaba na Coruña é cortaba algo o castellano. ..., que é prima **do** Vitor, que chaman Horténsia, dixo: ... dixonos alí fóra a sobriña **do** Vitor que estaba na Coruña.

(do は前置詞 de+定冠詞 o の融合形)

V 文学作品に見る人名定冠詞の使用

1) Ánxel Fole (1903-1986) は、ガリシア方言学では東部ブロックに分類される Lugo 出身の作家である。作品の *Contos*, Galaxia, Vigo, 1997, 92pp.において 121 例の人名定冠詞の用例を筆者は確認している。Hermida (2004) が指摘しているように、あるいは『ガリシア言語地図』の調査データの分析からも分かるように、ガリシア中央部とガリシア東部は人名定冠詞の使用が恒常的であることから、ガリシア東部ブロック出身のアンシエル・フオーレ Ánxel Fole が普通に人名定冠詞を使用していることがわかる。

Ánxel Fole の作品 *Terra Brava*, Galaxia, Vigo, 1955 から、その用例をいくつか挙げてみる。

- O Xesús botoulle unha ollada ó Toño.** 「ジェスはトーニオをちらっと見た」
O Toño fumaba ás escondidas. 「トーニオはこっそりとタバコを吸っていた」
A Varisa estaba soa na casa. 「バリサは一人で家にいた」
Era polo Suso, un rapaciño amigo seu. 「彼の若い友達のスーズによった」
 (前置詞 *por* + 定冠詞 *o* の融合形 > *polo* となる第二形式)
O Ramón pasábase alí as noites atendendo o foio.
 「ラモーンは道のでこぼこに注意しながら夜をそこで過ごしていた」

人名の *Toño*, *Suso* は *Antón*(Antonio), *Xesús* の愛称であることから、愛称に定冠詞を付けることによりさらに親近感を高めたものと考ええる。

2) 次に、*Ramón Otero Pedrayo, A Maorazga, Nós, A Coruña, 1928* から、2例を上げる。

- A Rosalía chorou. Non entendía de heroísmos a probe muller.**
 「ロサリーアは泣いた。哀れな女は英雄的な行為についてわかっていなかった」
A Bertha amaba as mans finas do Farruco e aquil aire señoril.
 「ベルタはファルーコの上品な手とあの堂々とした雰囲気を楽しんでいた」

3) 一方、*E. Blanco Amor, Xente ao lonxe, Galaxia, Vigo, 1976*² にも用例があるが、この場合の人名定冠詞の使用は、軽蔑の意味で使われていると考えられる。

- Non será vostede a Andrea González?** - Non. Eu son dona Andrea González.
 - あなたはアンドレア・ゴンサルベスじゃないでしょうか?
 - 違います。私は、アンドレア・コンサルベス婦人です

オテロ・ペドラーヨ *Otero Pedrayo* もブランコ・アモール *Blanco Amor* も方言学上、ガリシア中央ブロックに分類されるオウレンセ *Ourense* 出身で、人名定冠詞の使用が認められる地域である。

4) 次は、文学作品ではなく民俗調査から採集した口承伝承とロマンセの例である。参照したのは *López Valledor, F., Literatura de tradición oral nos Coutos (Ibias), Xeira, A Caridá, 1999.* で、アストゥリアス自治州のイビアス村にあたる地域である。筆者も二度ほどイビアスに訪問したことがあるが、イビアスはアストゥリアスのエオナビア地域にあるガリシア語領域の村である。

- E entonces Xan despertou, e claro alertóulle algo, e díxolle:**
 - Miría, ¿qué teis?
 - **É el Marelo** (eran asturianos) que lámeme el cu. Vénme por eiquí e tal ... (p.72)
 そしてそれからシャンが目覚ました。もちろん彼は危険を感じたのさ、そして彼に言った
 - ミリーア、どうしたんだ
 - 私におべっかを使うのはマレロ (彼らはアストゥリアス人だが) だ。私の所に来て、そして...

マレロは、この場合、人名ではなく渾名であるので定冠詞は必要となる。もし、定冠詞がなければ、**É Marelo que lámeme el cu.* のように非文となる。
 さらに、ロマンセにも人名定冠詞の使用例がある。(op.cit.p.87)

- ¿Quién murió, quién mo murió? / El segador de la Juana.**
No murió de pulmonía/ ni tampoco de costado
que murió de purgaciones/ que la Juana le había dado.
 誰が死んだ、死んじまったのは誰だ/ フアナの刈り入れ人夫
 肺炎で死んだんじゃない/ 腹痛でもない
 淋病で死んだ、ファナが彼にやったから。

VI ガリシア語における人名定冠詞の使用分析

次のような文から人名定冠詞の使用を分析してみたい。(例文は筆者の作例)

- 1) Dorinda é un nome ben bonito. 「ドリンドはとても良い名前だ」
- 2) *A Dorinda é un nome ben bonito.
- 3) Dorinda éche un nome ben bonito.
- 4) *A Dorinda éche un nome ben bonito.
- 5) Dorinda é máis bonita ca Maruxa. 「ドリンドはマルーシャより美人だ」
- 6) A Dorinda é máis bonita cá Maruxa. (cá は接続詞 ca+定冠詞 a の融合形)

例文 1)と 3)では、主語になっているドリンドという女性の名前は、具体的な個人のドリンドを言及するのではなく、一般的な意味として洗礼名のドリンドを指すので定冠詞は不要と考えられる。2)と 4)は、1)と 3)で見たようにドリンドという名前は一般的で具体的な人物を指している訳ではないので、定冠詞の a は不要になり非文である。3)と 4)には親近感を表す連帯の与格代名詞 che が動詞に前接しているが、これは話し相手を話題の中に巻き込む働きがあるだけで、定冠詞と共に起しても例文 4)は正しい文にはならない。人名定冠詞も親しみの口調を表すために使われるが、この例文では連帯の与格代名詞と共に起しない。

例文 5)は、「ドリンドはマルーシャよりかわいらしい」という意味と、「ドリンドという名前がマルーシャという名前よりもかわいい」という 2 つの意味が考えられる。人名定冠詞という点からは、人名ドリンドと人名マルーシャを比較した意味として捉えたい。例文 6)はドリンドという名前を持つ人物が、マルーシャという名前を持つ人物よりも美しい身体的特性があることを明らかにするために定冠詞 a の使用につながったと考えることができる。ドリンドとマルーシャという名前を持つ個人名を特定化して身体的特徴に言及しているから、定冠詞の a は任意ではあるが、ここでは付けられている。

- 7) Este é o Taque que ven todos os anos a Santiago. 「この人は毎年サンティアゴに来るタケです」
- 8) *Este é Taque que ven todos os anos a Santiago.

例文 7)と 8)は、関係代名詞 que があり先行詞は特定されているので定冠詞の使用が義務的となる。

- 9) A Uxía é a muller que conduce o autocar. 「ウシーアは観光バスを運転する女性だ」
- 10) A muller que conduce o autocar é a Uxía. 「観光バスを運転する女性はウシーアだ」

例文 9)は連結等式文で、主語と補語の転置は可能である。両者は同一のものと特徴づけられる。例文 9)は A Uxía éa. のように代名詞化して書き換え可能である。

- 11) A Carme é condutora de autocares. 「カルメは観光バスの運転手だ」
- 12) *A Carme éa.

例文 11)は連結叙述文であり、12)のように代名詞化すると非文となる。その理由は補語の condutora には定冠詞 a が不在であるからである。いずれにしても、例文 9) 10) 11) の Uxía, Carme は特定の人物であるために人名定冠詞 a が用いられている。

例文 9)の連結等式文には定冠詞 a (muller)の使用は必要であり、例文 11)の連結叙述文には condutora に定冠詞は使用されない。

- 13) O Alberte é o meu amigo. 「アルベルテは私の友人だ」
- 14) Alberte é meu amigo.

定冠詞が付いた場合と付かない場合であり、さらに所有代名詞に定冠詞が付く場合と付かない場合の例文であるが、両方とも正しい文である。人名定冠詞の使用は任意であると考えられる。繫辞文においては、ガリシア語では、定冠詞+所有詞+名詞のように定冠詞は義務的とされるが、親族名詞またはそれに準ずるものには定冠詞はつけなくとも良いとする規則がある。

まとめ

- 1) 人名定冠詞は、親しい間柄で会話の際に洗礼名(人名)に付けられる任意的なものである。
- 2) ガリシアでは、人名定冠詞の使用には地理的な差異が見受けられる。人名定冠詞の使用が標

準的であるとされるガリシア中央ブロックと東部ブロックに対し、西部ブロックにおいては任意的であるとされる。

3) 人名定冠詞の使用を分析した結果、その使用には制約があることが分かった。

追記: 本稿は、2015年5月23日東京外国語大学で開催された第53回日本ロマンス語学会大会の統一テーマでの研究発表に加筆・修正したものである。

謝辞: 筆者が作成した例文に2名のインフォーマントの協力をいただきました。ここに、お礼申し上げます。Colaboran D. Antón Santamarina (男 70 歳, ガリシア東部ブロック A Fonsagrada 出身, Lugo) e D. Xulio Sousa (男 52 歳, ガリシア中央ブロック Celanova 出身, Ourense). Agradecemos aos dous informantes.

参考文献

- Alarcos Llorach, E. (1967): "El artículo en español", *To Honor R. Jakobson*, The Hague, Mouton.
- Álvarez Blanco, R. et al. (1986): *Gramática galega*, Vigo, Galaxia.
- Álvarez Blanco, R. et al. (2002): *Gramática da lingua galega*, Vigo, Galaxia.
- Camino Noia et al. (1993): *Lingua COU*, Vigo, Xerais.
- Feixó Cid, X. (1993): *Iniciación ó galego*, Vigo, Ir Indo.
- Fernández Jiménez, M. J., (1971): *Estudio histórico del artículo gallego*, Tese de licenciatura, Universidade de Santiago de Compostela.
- Fernández Rei e Hermida Gulías, C.: (1996) *A Nosa fala, Bloques e áreas lingüísticas do galego*, Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega.
- Freixeiro Mato, X. R.: (2000) *Gramática da lingua galega*, Vigo, A Nosa Terra.
- Freixeiro Mato, X. R.: (2009): *Lingua de calidade*, Vigo, Xerais.
- Hermida Gulías, C., (1986): *O artigo: funcións, valores e usos*, Tese de licenciatura, Uniuersidade de Santiago de Compostela.
- Hermida G., C., (2004): *Gramática práctica* (Morfosintaxe), Santiago de Compostela, Sotelo Blanco.
- Instituto da Lingua Galega (1995): *Atlas Lingüístico Galego, II, Morfoloxía non Verbal*. A Coruña.
- López Valledor, F. (1999): *Literatura de tradición oral nos Coutos (Ibias)*, A Caridá, Xeira.
- López Viñas et al. (2010): *Gramática práctica da lingua galega*, A Coruña, Baía Edicións.
- Sousa, Xulio (1989): "O artigo cos nomes propios de persoa no galego moderno", *Actas do XIX Congreso Internacional de Lingüística e Filoloxía Románicas*, VI, A Coruña, pp.309-316.

Word Reference Forums, (artículo definido + nombre propio), Abril, 2008.

文学作品資料

- Blanco Amor, E.: *Xente ao lonxe*, Vigo, Galaxia, 1976²
- Fole, Ánxel: *Terra Brava*, Vigo, Galaxia, 1955.
- Fole, Ánxel: *Contos*, Vigo, Galaxia, 1997.
- Otero Pedrayo, Ramón: *A Maorazga*, A Coruña, Nós, 1928.